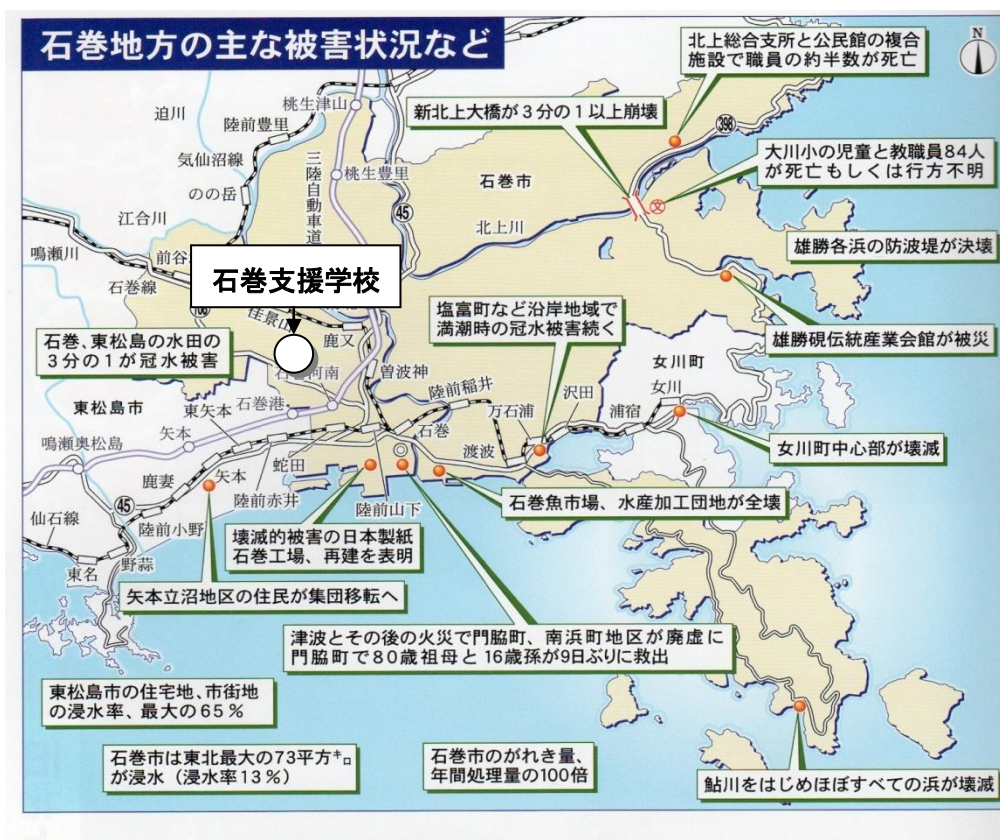


# 東日本大震災から学び取ったこと

## ■危機管理上の視点から

宮城県立石巻支援学校 校長 櫻田 博



## はじめに

3月11日 午後2時46分 東日本大震災が発生。本校は、当日小・中学部の卒業式で、小・中学部は11時半下校。高等部は臨時休業日であった。ほとんどの児童生徒が震災発生時は、家庭にいたと思われる。私は、体調不良で卒業式を欠席していた小学部Sさんの自宅で卒業式のお祝いを終え、担任と共に学校へ向かう車中で震災に出合った。異常な揺れで、周囲の電信柱や道路がまるで生きているかのように波打っていた。長時間続く今だかつて経験したことのない揺れ。未曾

有の非常事態である事を直感的に感じ取った。揺れが収まり、学校に向かった。学校に到着するとそこには青ざめた職員の顔。玄関前の駐車場に集合していた職員を直ちに集めて指示をした。

これは、震災直後の石巻支援学校の状況である。

本稿では、石巻支援学校長として震災当日から、どのように判断し、対応してきたのか、そして震災から何を学び取ったのかを、危機管理上の視点を中心に整理してみたいと考える。

## I 石巻支援学校の対応

危機管理上学校として最も大事なことは、子どもの命を守ることである。本校の危機管理マニュアルでは、(1)学校生活時 (2)登下校時 (3)在宅時に分けており、子どもの生活状況別に対応の仕方を考えている。今回の震災時は、在宅時に当たっているが、どのような場合でも「命を守る」という観点から子どもの安全な避難と安否確認が最重要視される。しかし、下校後でほとんどの子どもが在宅していることが推測され、尋常ではない地震の揺れから判断すると直ちに安否確認ができる状況ではなかった。職員を集めて次のような指示を行った。「対策本部の職員(校長、教頭、事務長、学部主事、養護教諭等)は、対策本部の仕事(情報収集や安否確認等、今後の対策の検討)を行うため残ること、それ以外の職員は、家族等の安否確認のため、十分注意して帰ること。」

この指示から本校の危機管理上の対応が始まった。

### 1 安否確認及び被災状況等

震災当日は、校長以下20人が宿泊し、避難所対応に当たった。職員は、安否確認班と避難所対応班と大きく2班に分け、役割分担を決めてそれぞれ行動した。安否確認は、翌日からの対応となった。本校は、石巻市、東松島市、女川町が学区であり、7コース7台のバスを利用して通学しており、学区が広範囲にわたる。また、地震と津波により電話や緊急Eメールも全く使用できなかった。さらに、市街地から津波による水がなかなか引かなかったことから、安否確認は対応できる職員が泥水につかりながら子ども一人一人の自宅や避難所等を訪問しての確認となり困難を極めた。自宅に行っても不在な時もあり張り紙をし

たり近所の方に情報をもらいながら避難所や親戚宅など考えつく場所をすべて回った。日を追うごとに確認できた数は増えていったが行方不明が数名あり、最終的な安否確認ができたのは震災から10日以上が経ってからだった。本校では、4名の子ども(小学部1名、高等部3名)が津波の犠牲になった。また、157名の内、51名(約3割)の家屋が津波により全壊・半壊状態となった。

職員については、102名全員が無事だったが、21名(約2割)の家屋が全壊・半壊状態にあり、家族や親戚を亡くした職員もいた。職員は、精神的ショックや疲労を抱えながら、子どもたちの安否確認や避難所対応等に追われた。

震災約一か月後(4月4日現在)の子どもたちの生活状況は、表1のとおりである。表から分かるように約3割の子どもが親戚や避難所で生活したり、他市町や学区内での転居を余儀なくされた。この割合は、家屋が全壊・半壊状態となった子どもの割合とほぼ一致しており、家屋に住めなくなった子どもたちの生活状況が一変したと言える。

表1 H22在籍児童生徒の生活状況(4月4日現在)

生活状況	小学部	中学部	高等部	計
自宅で生活	34	21	49	104
親戚宅で生活	11	2	8	21
避難所で生活	6	3	8	17
他市町へ転居	2	1	0	3
学区内で転居	2	2	4	8
死亡	1	0	3	4
計	56	29	72	157

<備考>他市町へ転居は、4月末日現在

### 2 避難所対応

震災当日は夕方から雪が降ってきてとても寒い日だった。いまだかつて経験したことのない大地震の状況から、地域住民がきっと本校に避難して来るであろうという予想をしていた。「学校は

地域と共にあり、地域に育てられ、地域の中で成長し、やがて地域に貢献していくもの」という教育信条を掲げていた私は、今こそ地域に貢献するときなのだという気持ちを強くした。玄関先でストーブを焚き、私も含めて職員数人が避難者を待っていた。だんだん薄暗くなり雪がちらつく中、ストーブの明かりを頼りに地域の方や帰宅困難者、本校の子どもたちの家族も集まり、全部で40数名が来校し、急に忙しくなった。体育館にストーブを焚き、マットを敷き、布団や毛布類などすべてを集めてくるように指示をした。避難所としての経験もないことから避難所運営のマニュアルはなかった。現実の緊急課題について、冷静に判断し一つ一つ課題解決していくことが最も重要であると考えた。避難所は生活の場である。重要なポイントは、食事・トイレ・睡眠という最低限の生活環境を整備することであると体験をとおして痛感した次第である。

結局本校は、震災当日から5月8日まで避難所運営を行った。在籍している子ども延べ13人

(小学部5人、中学部4人、高等部4人)卒業生2人の家族を含み、介護が必要な高齢者21人や地域住民等最大で81人が避難していた。避難所運営について工夫したことは、以下のとおりである。

①可能な限りプライバシーの保護や安全・安心な生活環境を保障するため、4日目から支援のニーズ別(全介助の高齢者、自閉症等)に部屋割りを行った。②ボランティアの有効活用を考えた。そのために、教育庁特別支援教育室と連絡を細やかに取りながら、疲労が蓄積した本校職員の負担軽減を図るため人的・物的支援を要請した。特別支援教育室では、バスを所有している学校(北部が金成支援学校、南部が船岡支援学校)を中心として近隣の学校の職員を乗せて本校に職員を派遣するシステムを直ちに構築してくれた。北部(金

成・古川支援学校、小牛田高等学園)と南部(船岡・名取支援学校)2チームのボランティアチームが編成され、3月18日～30日まで1回10名前後の職員が必要な物資を運びながら、2泊3日で第7団まで切れ目なく本校に来て活動を行った。また、4月からは宮城教育大学の菅井・中井教授の計らいで特別支援教育専攻の学生ボランティアを4月末日まで同様の方法で派遣してもらった。ボランティアは、本校職員の指示の下、食事や清掃等の避難所運営の外に、本校の子どもへの心理的ケアとしての遊びの活動の実施や兄弟等の勉強の面倒も見た。さらに、避難所運営の健康管理を徹底させるため養護教諭の派遣を要請したところ、高校の養護教諭2名を2泊3日で3月22日～28日までの期間、第3団まで派遣してくれた。体調を壊す避難者が増加している時期でもあり、養護教諭はうがい、手洗いの励行や清掃の徹底等呼び掛けるなど環境衛生や健康管理の面で重要な役割を果たした。③組織的な避難所運営を行った。校長を中心とした対策本部の下に避難所運営組織として、受け付け・調理・清掃・介助・救護の各班を編成し、班の具体的な仕事内容は一覧にするなどメンバーが交代しても円滑な活動ができるようにした。④避難住民の中でも自治組織を立ち上げ、自治組織の活動を中心として避難所運営ができるよう移行した。それに伴い、本校職員の避難所運営には、県教育委員会が



震災後の石巻市内

創設した緊急学校支援員を中心としながら、4月20日まで本校勤務となった転勤予定の兼務発令職員数名が加わった。緊急学校支援員は本校職員OB2名を採用し4月から2か月間の活動となったが、子どもや学校内の施設・設備等も熟知している方々なので安心して避難所運営を任せることができた。また、自治組織のリーダー（本校保護者）と石巻市保護課、学校代表が随時話し合いを持ち、避難所運営の課題解決や学校再開に向けた二次避難所への移転等の問題について協議を重ねた。その結果、5月8日に二次避難所への移転も円滑に行われた。4月中旬からは、本校職員は学校再開に向けた家庭訪問や心理的ケア等の取組に専念した。

### 3 学校再開に向けての取組

学校の始業式・入学式は5月12日であった。学校再開に当たり、必要な条件を3点と押さえた。①子どもの多くが避難所や親戚宅等で生活し、生活状況の変化と共に生活根拠地が変わることと併せ、がれきの撤去が進まずバス路線上に危険箇所があることに鑑み、バス路線の確定と安全確認が必要であること。②給食納入業者の多くが津波で流され、給食再開のため納入業者と改めて契約を行う必要があること。③医療的ケアを行う看護師のほとんどが避難所生活をしており、看護師の確保が重要であること。この3条件を満たし、行事等の変更で何とか標準授業時数を確保できる日を学校再開日と目標を定めた。目標が定めれば大事なことは、子どもの生活状況や心理的変化の把握である。そのために、家庭訪問を二期に分けて行った。一期は4月12日～14日で家庭環境の把握と心理的ケアを中心として、二期は4月27日～5月6日で学校再開に向けた動機付けと心理的ケアを目的として行った。家庭訪問の結果、主に次のような特徴的な行動が見られた。



瓦礫に挟まれたバス経路（鳴瀬コース）

- ・余震に敏感になり、その度に起きたり怖がって泣く。
- ・突然泣き出したり、頭をたたく自傷行為や他傷行為が増えた。
- ・失禁や夜尿が多くなった。
- ・食べたものを吐くことが多くなり急激にやせた。

家庭訪問後は、各学部主事からの報告を行い、家庭環境や心理的状況の把握と具体的対応策を検討し個別的に対応した。また、子どもたちの心理的ケアとしてボランティアを活用し、希望する子どもを学校に集めて、作業療法士によるリラクゼーション講座（9名参加）や兵庫県の臨床心理士チーム（ひょうごHEART）による「子どもの広場」



兵庫県の臨床心理士チームのみなさんによる心のケアのボランティア「子どもの広場」

(絵かき, スポーツ, お菓子づくり等) (48名参加)を開催した。長い避難所生活で子どもも保護者もストレスが溜まっていたが, こうした企画は, 子どもが本来持っている活動意欲を喚起し, 学校再開に向けた動機付けや期待感を持たせる上で有効であった。

#### 4 学校再開後の取組

学校は, 5月12日に始業式, 入学式を行った。学校が始まると子どもたちはみるみる明るさと元気を取り戻した。ストレスから生じる不適応行動が減少し, ほとんどの子どもが本来の姿に近づいていった。学校再開に時間が掛かっただけに, 日常の教育活動が, いかに子どもの心理的安定につながっているのかを再認識する契機にもなった。また, ボランティアを活用し音楽的活動を取り入れた行事も意図的に設定した。例えば, 自衛隊による演奏会やジャズピアニストによる音楽会の開催である。子どもたちは歌ったりダンスをしたり, どちらも本当に楽しい活動になった。音楽は, 人の気持ちに癒しや活力を与えるセラピー的効果があると実感した。また, 父母教師会では古川支援学校からハートバッチの寄贈を受けた。バッチは社会の障害児理解を促進するねらいがあり, 新たな保護者の運動も始まったところである。



「音楽の贈り物」自衛隊音楽隊訪問演奏会



ジャズピアニスト河野康弘さんによる  
「ワッハッハコンサート」

ハートバッチで伝えます  
障がいがあることを

「ハートバッチ」は  
「我が子に障がいがあることを周囲の人に理解してもらい、温かく見守って欲しい」という願いで大崎で生まれました。  
いつの日か「障がいがあります」の文字のないバッチになることを石巻でも目指しています。  
応援よろしくお願いします。

**バッチゲー👍大作戦in石巻展開中!**

障がいがあります

ハートバッチは地域に住む障がいのある方にも付けていただけるように実費でお分けしています。  
本校父母教師会事務局までお電話ください

**宮城県立石巻支援学校父母教師会**  
連絡先：石巻市船田新立野410-1  
TEL. 0225-94-0202

父母教師会の障害児理解・啓発の取組

## II 東日本大震災からの教訓

### 1 危機管理マニュアルの見直し

危機管理の鉄則は、最悪を想定して最善の準備をすることである。最悪の想定は、大地震・津波・火災の連動型の災害である。本校では、マニュアルを次のとおり見直した。①津波を想定した通学バス走行中の時間ごとの避難場所の設定 ②緊急Eメールが使用できない場合の安否確認方法の確立（職員の居住地区に基づく地区割担当の設置）③児童生徒一覧表の整備（緊急時の連絡先一覧と避難場所の掲載）④災害用備蓄品の準備（子ども、保護者、職員、地域住民の三日分の食料と災害用備品の充実）さらに、学校再開後に避難訓練を2回実施し、組織的対応の改善を図った。

### 2 関係諸機関・地域との連携

大災害時は、学校独自の力だけで困難を乗り切ることにはできない。本校は県教委をはじめとして地域や多くのボランティアの献身的な支援によって非常時に対処することができた。開かれた学校として、関係諸機関との組織的なネットワーク構築が重要である。

### 3 障害児の理解・啓発

大災害時に障害児が地域の小・中学校等に避難

して生活できることが肝要である。そのために、普段から障害児が地域行事に参加したり、居住地校学習を推進するなど、地域における障害児の理解・啓発を促進する活動を意図的・計画的に行う必要がある。

### 4 最後の砦・特別支援学校の役割

大災害時に障害児が地域の小・中学校等で避難所生活を送れることが最も望ましい社会の姿であろう。しかし、どうしても地域での避難所生活が立ちゆかない場合は、特別支援学校が最後の砦として避難所を開設する使命を担っているのではないかと考える。そのため、特別支援学校には、障害児の避難所として、ハード・ソフト両面の充実とそれを保障する法的整備が望まれる。

## おわりに

学校の危機管理能力を高める鍵は、イメージネーション力である。私は3月11日の卒業式前に、式進行中に地震が起きた場合の行動を職員に指示していた。人間の不安感情をコントロールし、具体的・組織的な行動力に変えることこそ危機管理能力であると考えます。震災からの学びを具体化することが、今学校に問われている命題である。

**非常災害時持参用品**

場所：看護部控室  
長野県立東御代中学校 看護部

**1日目の荷物**

田中綾吾  
一時避難  
吸引器

- ・イリタークーラー 計量器20ml 10ml 1つずつ
- ・カテーテル1 ・テープ 1 ・充電式吸引器 ・薬1日分
- ・キシロカインゼリー(ルブリケーティングゼリー) 1
- ・水 500ml ・ラコール4錠 ・おむつ5枚・おしりふき1
- ・ビニール袋 ・バスタオル(冬場は厚いものに変える)
- ・除菌ワエント ・消毒ジェル・ホッカイロ大小2こずつ
- ・傘(下着・長ズボン・靴下1・防寒チューブ 1
- ・新聞紙 ・使い捨て手袋 ・ごみ袋

**2,3日目の荷物**

- ・ラコール3錠
- ・水500ml 2本
- ・おむつ10枚
- ・おしりふき1つ

予備教室にあります

看護師室の戸棚に保管されている医療的ケアの為の非常持ち出し物品